立教観光学研究紀要　　第24号　　2022年3月
St. Paul's Annals of Tourism Research No.24 March'22
pp.23–24.

修士論文要約

中ロ国境における国境観光の発展プロセス
―黒河市を中心として―

Development of Border Tourism in the Border Areas of China and Russia:
Through the Case of Heihe City

田　思源
TIAN Siyuan

キーワード：国境観光，国境都市，アムール川（黒竜江），黒河市
Keywords : border tourism，border city，Amur River（Heilongjiang），Heihe City

1．研究背景と研究目的

国境地域は，国境線によって空間的に分断され，両側の地域における言語，文化及び空間整備の差異がもたらされた．松村(2009)は国境線の画定と変化に関わる歴史的変化に加え，国境の分離性と透過性よって国境地域は独自の地域的性格を帯びており，国境をめぐる人・財の流通などの経済活動と同様に，国境地域の景観や地理的な相互作用は，観光の対象として捉えられると指摘している．

日本で展開されている国境観光は，主としてJIBSN，NPO法人国境地域研究センターによって開催される少人数の団体ツアーであり，スタディーツアーの研究を中心に行われている．しかし，国境都市の地理的性格と歴史的背景に基づいた国境観光の形成経緯，形態変化の実証的研究が欠如していることが指摘できる．

本研究では，中国・黒河市を研究対象に，中ロ国境観光ツアーの実態調査を通して，中ロ国境観光ツアーの形成経緯と発展プロセスを明らかにすることを目的とする．とくに，黒河市市街地の土地利用調査に関する分析に基づき，国境観光の推進と黒河市の都市空間の相互作用を検討する．

2．研究の方法と手続き

本研究は，時期別にツアーの形態を分析するとともに，1988年から2021年現在に至る国境観光の発展プロセスを整理し，各ツアーの諸形態を類型化する．また，商業金融用地を指標とする黒河市街地の地域構造の変容を分析し，国境観光との関係性を検討する．

3．研究の概要

本研究は5章で構成されている．

第1章では，研究の背景，研究目的と研究方法，研究対象地域の選定理由を述べた．

第2章では，既存の史料，年鑑，新聞を活用し，清政府期から現代までの，黒河市をめぐる中ロ国境の画定・変遷プロセスについて整理した．また，初期の国境観光の形成経緯と「倒爺」の集団について考察した．黒河市の「倒爺」（中国語のピンインではDAOYE）とは，黒河市から国境観光ツアーを介して，ブラゴベシチェンスク市に渡航し，「物物交換」によって商売をする人びとを指している．

第3章では「倒爺」ツアーから，黒河市の国境観光の三つの形態を検討する．1990年代，「倒爺」らの貿易ツアーの形態は，ロシア側のブラゴベシチェンスク市に中国の「倒爺」向けに設置された「物物交換」の拠点を中心とする日帰りツアーであった．その順路は，港（税関）－レストラン－倒爺の物々交換地点―港へと帰着する短時間かつ短距離なものであった．元「倒爺」らへの聞き取りによって，当時の貿易ツアーの参加者属性，参加手順，物物交換の過程，交換された商品などを明らかにし，初期の中ロ国境観光ツアーの性格を把握することができた．

2000年代以降，伝統的な「中ロ一日游」では，観光客の属性変化によって，かつての「倒爺」による貿易活動を主体とした展開から，純粋な観光に重心を移していることがわかった．観光形態の変化としては，「倒爺」による貿易活動向けの日帰りツアーから，「中ロ一日游」と「中ロ二日游」が主流になった．とくに，ショッピングと宿泊を含む「中ロ二日游」は人気を集めている．観光ツアーには，ブラゴベシチェンスク市の代表的な都市景観の眺めとともに，歴史的，宗教的観光施設を中心としたルートが設定されている．ツアーへの参加目的と観光行動に関する参加者への聞き取りによれば，出身地や出発地，また年齢によって観光目的が異なることがわかった．

2020年の世界的な新型コロナ感染症の感染拡大を背景に，黒河口岸（税関）をはじめ，中ロ国境地域のアムール川沿岸に点在する口岸は閉鎖され，越境は完全に禁止された．そのため，観光の形態はロシア側への越境に重心を置いた対外型から，黒河市域を中心とする観光地の連携による内向型に転換された．

それらは3つのパターンに分けることができる．最初のパターン1は，自動車を利用して黒河市郊外における火山，森林，温泉，峡谷などの自然環境を周遊する長距離路線である．パターン2は，博物館を介して黒河地区の地理，民俗，歴史，少数民族に関心を寄せる観光客に向けた見学路線である．さらにパターン3は，黒河市街地の都市観光や民俗体験，郊外の自然風貌を組み合わせた複合的な路線である．

第4章では，地理学の視点から，中ロ国境観光の展開が黒河市に与えた影響について検討した．そのために，「黒河市城市総体企画図」の比較に基づいて，商業金融用地を中心とする空間的配置の変遷に着目した．2002年版と2012年版の城市総体計画図を比較すると，旧市街の商業金融用地面積は，およそ40%減少した．その要因として，中ロ貿易と観光産業の拡大に伴う都市化の加速によって，とくにデパートの大型化・高層化が進展したことが挙げられる．

商業金融用地面積の減少とともに，商業金融用地の分布変化もまた読み取れる．2002年版の都市計画図によって，商業金融用地のおよそ80%は市街地西部，アムール川と垂直方向に配置されていた．一方，2012年の配置をみると，商業金融用地の配置はアムール川との垂直方向から，アムール川と並行する街路沿線へと変化した．とくに，中央商業歩行街とロシア商店街にその傾向が顕著にみられた．

この変化の要因は，1990年代に「中ロ一日游」が開設されて以降，ブラゴベシチェンスク市を訪れた中国人観光客が，ロシア製の日用品や土産品を大量に持ち帰り，中央街で販売していたことと関係する．当時「倒爺」の転売活動は道路に沿って，露天の個人的な小規模販売によって行われていた．しかし，都市計画上，当時の中央街は住宅用地と行政用地が主体であった．この「倒爺」による転売活動は2012年の都市計画に影響し，中央街や海蘭街東側の土地利用の転換へと結びついたのである．

最後に，ロシア商店街の店主らの出身地，出店経由，親族のネットワークから，1990年代中ロ国境観光初期の「倒爺」の集団を分析し，黒河市特有の観光産業の性格を把握した．

4．結論

本論文の主要な結論は以下のとおりである．まず，黒河市の国境観光は各時期に応じて異なる形態に変遷してきたことが確認できた．1988年―2000年代初頭は，「倒爺」の貿易活動を中心とした貿易ツアーの時期，2000年代初頭―2019年は，観光を主目的とした国境観光の成熟期と位置づけられる．さらに2020年のコロナ襲来以降には，国境を越えない新・国境観光が生まれた．

次には，黒河市の国境観光の進展と形態変化が，黒河市街地の地域構造と相互に影響していることがわかった．商業金融用地を指標として，商業金融用地の増減・移転と国境観光の形態変化との関係を見出すことができた．

最後に，「ロシア商店街」の検討を通して，黒河市街地に特有の国境観光産業の性格が明らかになった．とくに，商業の同質化および限定的な地域の同郷団体によって構成されるその特徴には，海外に分布する「チャイナタウン」との類似性を指摘することができたが，さらなる検討は今後の課題とする．■